

昭和
和和
二二
四四
十九
九年
七月
月三
月十
十五
日第
三三
行種
(每種
月一郵
回一便
・十五物
日認
發行可

(通第三〇二号)

次

近角常音先生御法話……………大字三右エ門記……………(1)

篤信者・前田清次郎さん……………柳瀬留治……………(10)

随感随想……………園憲章……………(14)

目

念仏詩抄……………木村無相……………(16)

念仏成仏の白道……………花田正夫……………(19)

慈光

第二十六卷

第七号

近角常音先生 御法話

……昭和廿六年四月三日。座談会。於西源寺……

大字 三右エ門 記

エ……昨日来より座談会を開いて皆様に聞いて頂いたの
であります、今日も引続いて聞いて頂くと思ひます。
ア……初めから皆様よりお尋ねを頂いてそれに対して答
えを申してよいのでありますが、その前にごく短くお話を
致してみようと思つてあります。

私は始終東京で聞いて頂いてゐるそのまゝの形を聞いて
頂いてゐるのですが、或はこの地方の御聴聞の話と
合わぬところがあるのでなからうか。若しそうでありまし
たなれば、どうか後程座談会の席上で、どういふものか
ということでお聞き取り願ひたいのであります。

私の方は 親鸞聖人ご教化の趣きをそのまゝに、寸分間
違いなく、そのままお聞き取り頂いてゐると思つてゐる
のであります。

したが、どうしても頂けないのであります。

頂けないのは何故であるか。それはお慈悲の不思議のと
ころ、ここ御真実、お慈悲の不思議が聞かせて頂いても頂
いても、これなれば確かりしたということが分りませぬ。
何か確かりしたものをと考へて、自分の心持の変化に氣を
つけるばかりであつて、仰せ下される向うさまのご親切が
分りませぬ。まるで雲を掴むような話のようであります。
如何程聞いても自分に力味が入つて頂けぬのであります。
このことは如何にも吾々としては無理のないことなのであ
りますが、ここの処が肝要なのであります。
何処が肝要なのかと申しますと、向うさまのご親切な仰
せを聞く、お慈悲の程をよく聞かせて頂くということなの
であります。

私はお慈悲を分らせて頂いてから、兄貴の話を思つてみ
ますと、こちらは聞いて何とか分ろう／＼としてゐるので
ありますが、実はあの様に言うて聞かせて呉れてゐる、そ
のことがお慈悲でないか。

それは説明ではなくして聞いて下さい／＼とどれだけ
も話して下さい、そのお慈悲が力なのだから、あの
ように聞かせて下されてゐるものが、大変な力のものであ
つて、このことが何よりも大事なものであるに、此方は自
分にばかり力(りき)みかえつて聞き間違ひをしてゐたも

それで信心とはどういふことかと申しますと、これは先
日来よりお話申しました通り、歎異抄の才一章の、
「弥陀の誓願不思議にたすけられ参らせて、往生をば遂ぐ
るなりと信じて、念仏申さんと思ひたつ心のおこる時、
即ち撰取不捨の利益にあづけしめたまうなり云々」
この御教化の趣きを頂いてみますと、私は自分の頂かせ
て貰つた時の心持にびつたりと合うのであります。それ故
ここの処、この仰せが有難いのであります。

弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、とあります
それでありまして、私も永いこと兄貴(常観先生)の話
を聞いて居まして、兄貴もあんなに喜ばせて貰つてゐるか
ら私も仏様のお慈悲を頂きたい／＼と考へてしきりに力を
いれて聞いて居たのであります。これを十年続けて居りま

のであると思つたのであります。

或人の話に、御伝鈔の何処が有難いかと聞いてみたところ、
「云々」のところ有難いと申したという。云々のお
言葉は、分らせてやりたいとのご親切のこもるお言葉故に
有難いのであります。何処がお慈悲かと云うに、皆に云つ
て聞かせて下されてゐる、そのことがお慈悲なのでありま
す。それで「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて」
と本来云う罪業の人間、吾々の業に悩む有様は、これ
は毎日の姿なのであります。

ここに慈悲ある人あつて本来たすけるべき筋合ひもない
のに、その人が苦勞をして下されてゐるという話である。
あり得べからざる人が親切に心配して下さるというこ
とであります。

ここで云うお話をしてみます。浜野さんというハワ
イ移民の元祖みたいな人がありまして、彼の地で大成功を
して沢山の財産を造られたが、日本に帰つて来られてから
病氣になられたのである。病氣も重くなつて精神上どうし
ても安心ができぬ。私に来て話をして欲しいとのお使いが
あったので、私は出掛けて行つてお話を申し上げました。

その浜野氏が私に申されるのに、

「仏様が私をお救い下さるといわれるが、親類同志なれ
ば助け合うこともあるが、仏様と吾々は無関係の間柄で

ある。その無関係の仏さまが助けて下さるなどと言われたとて、その様なことは理解出来ぬ、訳が分らぬ」と申される。

「自分は商売人として一代通して来た。その方、商売人は何よりも悪い人間と考えて居られる、そう云われる氏は誠実な人なのでありますが……。本来商売人というのは、悉く計算ばかりで損をすることが嫌いで、儲けることのみ考えているものである。それ故、このような欲深い人間に赤の他人の仏さまが何故お助け下さろうとしてご心配下さるのか、訳がわからぬ」

と申されて、それを私に尋ねられたので、私は答えて申し上げたのであります。

○ 仏さまの救済の根本は何か、その一番の要点は吾々の罪業を救いたいと思召したたれたこと、これが根本なのである。このことは本来助ける筋道のあろう筈のないにかかわらず、誓願不思議をおおし下され吾々を救いたいと思召した下されたのである。これはこの世の話でない。

大学の先生など、理屈の多い人々はこの話をいたしても理屈にあわぬ信用できぬといわれる。それはその通りであって、この仏さまの話というものは、吾々の苦しんでいる有様を御覧あつて、憐み給う余りに安養界よりこの世にお

姿を現し下されて、仏さまの世界の有難いことを説いて下されたのである。

人間の考えたことをお話するのではない。仏さまの説かれたことである。釈迦如来出興してとある通り、このお方が無ければ安養界とは連絡がないのである。

お釈迦さまがこの世に姿をあらわして、それを吾々に届けて下された。私は私の兄貴から説いて聞かされたのであって、兄貴なくば私は仏さまのお慈悲のこと分らなかつたのである。

○ これは仏法の理屈話だけであつた、こうだと申して見たところで分らぬことなのである。あり得べからざる話、これが誓願不思議である。このあり得べからざる話がなければ人生は暗闇である。これを氏に申したのである。

○ 私是最早七十歳になりました。何時死ぬやも知れませぬバタツと倒れると、それでお終いであります。共產主義の人達は何の彼のと申しますが、それはこの世の原理を言うているものでありまして、その理屈で人間が救われることではないのであります。

この世でない、特別の仏の世界から不思議を現じて、吾々人間にそれを届けて下されたのであります。

またいらぬお話なれど、永代経の際申上げました通り、

正信偈の、

無量寿如来が有難うございます、不可思議光如来が有難うございますと、何も余のことではないのであります。

吾々は、ああだ、こうだと、理屈づくなるのでありますが、何も余に引きかけることでない。暗がりの吾々に……力ない吾々をお救い下される、それが有難うございます、有難うございますと、親鸞聖人は、いつもこれをお喜び遊ばされたのであります。

皆さん、これで毎日を通じて頂くことであります。吾々を捨てないと仰せある仏のお慈悲を頂いて、ともかく今日を送らせて貰うのであります。

○ またお話致しますが、昨年の報恩講の或夜の話。

私は、君等、止め給えと申したのであります。その人達は、平素仏さまの話をきき、一応は有難いと思わせて頂いている人達であります。是等の人達が、仏さまのお話を聞かせて頂いている自分達としては、チト慎しまねばならぬ、心得ねばならぬ、そう心得ることが如何にも仏さまの思召しにかなう善いことのように考えて話合っているものであります。

私はその話を小耳に狹んで聞いて居りまして、これは飛んでもないことを話し合っている。それ故私は、それらの

人々に

「君等は何をいうているのか、止めて終いなさい」と申したのであります。

私はそこで歎異鈔十三章をお話申し、摂取不捨のお救いのことを申した。私はこのことをつくづく申しました。

東京へ帰りましてから其夜の一人の方よりお手紙を貰いました。その人の申すに、それまでありふれた仏様のお話を考えていたのであるが、如何にも広大なお慈悲である。甘える者に呆れて下さらぬとある広大なお慈悲なることを知らされて、本当に有難うございますとの御手紙を頂いて、私も大変有難く思わさせて頂いたのであります。

○

法蔵菩薩因位時

在世自在王仏所

觀見諸仏淨土因

国土人天之善惡

建立無上殊勝願

超発希有大弘誓

何が希有（けう）か、殊勝願かと云いますと、人様にお話もならぬ、つけあがつた奴にお呆れ下さらぬという、その広大な御本願、これが希有の大弘誓なのであります。

私の兄貴はこの無上殊勝の御本願のことを申していたのであります。いらぬことを申しますが、吾々喜ばねばならぬ、喜ばぬものは助けぬ、そのような仏さまなれば仕樣ないのであります。

我々の如何をも顧りみずお助け下さると仰せある特別の
仏さま、是れが大弘誓なのであります。

五劫思惟之授受 重誓名声聞十方

如何なる隅々までも届く光、無辺光、無碍光、無对光、

是等は皆仏さまから起こされてくるのであります。

光炎王、清浄光、歡喜光 智慧光、不断光、無称光、

超日月光を放ちて塵刹を隅々まで照らす。

一切群生蒙光照、光照を蒙らざるはなしである。

本願名号正定業 至心信樂願為因。至心信樂の願を因

となす。まあお聞きの通りで、南無阿弥陀仏、々々々と

選択本願を離れた名号なし、この名号を頂いて南無阿弥陀

仏々々々々々。

エ……私もうろくしまして、このようにお話しを申して
いるうちに文句を忘れてしまひまして、思い出すのにどま
どま致して居ります。

成等覺証大涅槃 必至滅度願成就

等覺を成ず、エ……この世ながら正定聚。これは攝取不
捨の願によって、仏さまが金輪際おとさぬ、これ攝取不捨
の故に。その次

如来所以興出世 唯說弥陀本願海

ただ弥陀の本願海を説かんと成り。如来さまの世に出でま
したのは何のためであるか。ただ吾々如き何ともしてみよ

と御利益の方へ走る。これで治る場合もあって、これはど
ういうものであるか、精神作用というか、いっぱし治る如
くあるのである。私の方の求道学舎へ、金光教で腎臓病が
治った学生が参りまして、学舎に入れて欲しいと頼みに参
った。金光教を信仰したと正直に云う。あまり正直に申す
ので面白い学生と思ひ、又入れねばならぬこともあって入
れたのであります。

これからさきを申しますると逆な材料にとられて変なこ
とになるのであります。その先を申しますると、その
学生が私共の話をきき、これまでは変な教を信じていたと
分つて、その金光教から離れてしまった。離れてみると病氣
が再発した。こんなことを申すと皆さんに誤解され易い。
信心をよしたら三年目に再発するとなれば誤解を受け易い
のであります。治療の方法がないと迷信などに入り易う
なりまして、流行性感冒がはやりまると、何とかの先生は
臍の緒を煎じて飲ませたといふことで、愈々となれば人間
は何とかしたいと考えて迷うてしまふのであります。

斯うした世の中に於て、私のような氣の弱い人間が、思
いもかけぬ仏さまの広大のお慈悲をわからせて頂いて、こ
ちらが善いことをしなくてはならぬとあってはたまらぬの
であります。

私の長女の主人の勤めて居ります会社など、学者の寄り

りもない者を、助けたいばかりに此世にあらわれ給うたの
であります。他の宗旨の人々から言えはお叱りをうけるか
も知れませぬが、何かに小理屈を申しているのは、本願の
不思議を知らざるものの言うことであります。

等覺（とうがく）を成り大涅槃を証するといふことは、

此世も未来も生命終つたなればでありまして、極樂へ往け
る往けぬでなく、仏さまの車に乗せて頂いて、仏様の方で本
願の仕掛けをして下されて、如何なる者でも参らせてやる
ぞと仰せある不思議の願力で参らせて頂くのであります。

○

私は文句を忘れまして滅茶々々になつてしまふのであり
ますが、エ……こうしてお話を申してここまで来ますと、
段々お話が肝要の処へ来て参つたのであります。

今生、暗がりの中に於て、金があり、自由ばかりあるも
のでないのであります。そうばかりでもない、いうてみま
すれば、この世は苦しみの巷（ちまた）なのであります。

その苦しみの巷を仏さまが御覧あつて、善きにつけ、悪し
きにつけそれを捨て給わぬのであります。

さきほどもあちらの部屋で、或人の話に色々と申してい
られましたが、病氣をしても仲々に治らぬ、始めはお医者
に診て貰っているが、仲々なおらぬとなると、氣持が迷う
て遂には どことこの神さま、稲荷さま、或は大本教など

集りで、云わば理屈で固まつている処であります。その
一人で天理教に帰依した人がありましたが、他の人々は、
そのような教に、立派な学者が帰依するとはひどいことだ
と話合っている。この人が何とかの病氣を治したところが
ご信心を怠ると再発をする。私は天理教のことは全く知り
ませんが、一生懸命になつてやらねば、教に叶わぬよう
であります。遂にその先生は、そこを止して大和の天理教の
本部に行つてしまったといふことで、これでは滅茶々々で
あります。

そこで人間は、愈々となればそうしたい世の中、ついそ
うなつてしまふ世の中なのであります。小心の私などは
どう仕様もない。

然るに、こちらはどれだけくしゃ／＼しようが、こちら
はどれだけ仏さまのお慈悲を忘れて居ようとも、仏様の方
が捨てて下さらぬ。小心の私など、そればかり力とさせて
頂いているのであります。我々の出来ぬが可哀想と仰せあ
るこれだけを有難く思わせて頂くのであります。お正信偈
にお示しの如く、朝夕に思わせて頂くのであります。

そのように思ひますにつけて、どうしてかかる不思議の
お救いに遇うことが出来たのかと、よくよく考えてみます
と、私のは、兄貴が居なくては仏様のこと分らせて頂けな
かったのであります。兄貴があつたればこそであります。

私と申すものは兄貴と長年伴うてまいった者で、その私は何とかしてお慈悲頂こうで力んで居りました。これを兄貴から見えておりますと、私の有様がよく分ります。兄貴は心の中で思うて居りましても、ついぞ一言も私に、仏さまの話をきけなどとは申しませんでした。

けれども、それだけに気にかけて、遂には蔭で愚痴をこぼすまでに、私のことに気が掛けて心配してくれていたということでもあります。

私はこの兄貴の愚痴話を聞かされてみて、これは有難いものだと思ひ分らせて貰つてみると、何処から兄貴の口をついてこのような有難いものが出たのかと思つてみますと、それは兄貴の頂いてゐる仏様から来ているのであります。仏智不思議なのであります。

その元を辿つてみれば何処から来たのであるか。第一に親鸞聖人であり、又歎異抄、奥書にあるところの流罪云々とある。是等受難の人々が、仏さまの広大なるお慈悲を命がけてお譲り下された、その人達のお蔭で私共は仏さまを、聞かせて頂くことが出来たのである。その第一の根本はと申せば、お釈迦さまである。そのお釈迦様だけではない、そのもうひとつ根本の阿弥陀如来に帰依せよと仰せあるのであります。

五濁惡時群生海。

応信如来如実言。

耳四郎にすれば、これも有難かつたであらう。それ故、その後、悪事を思いとどまつたとありますが、むしろ極悪人の耳四郎、到底天人共に容れられぬという耳四郎が、かかる極悪人を捨てぬと仰せある仏智の広大さを聞かされて、応信如来如実言。即ち、まさに如来の如実の言を信ずべし、と、能く一念喜愛の心を起こされたところが肝要なのであります。

それ故に、不断煩惱得涅槃となり、凡聖逆誘齊廻入となり、信心海に廻入すれば、衆水の海に入れば、甘いもからいも、海に入らば皆一味となされてしまうのであります。

一番申したいことは、歎異抄第一章にあります如く、弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、と、人間に生れた以上は、善きにつけ、惡しきにつけ廻心せねばならぬのであります。泣きの涙、泣くだけでは何ともならぬのであります。一家仲よく願わぬものはなけれども、然しその如くならぬ。仿いても仿いても駄目では仕方ない。金持にもなれず、右でもうまいことできず、左でもうまく行かぬ。こんな人は何処で満足するのであるか。満足せないうちに死んでしまえば、苦しみじまい、狂いじまいであります。もがけば、もがく程、是丈けやったのに情けないことだとなるのであります。

箸にも、棒にもかからぬ吾々同様は、如何なる難儀をするやも知れぬのであります。如実言とは、仏さまの仰せであります。吾々の仕様のないのをお察し下されたばかりに、遂にこの世へ現じたまうたのであります。

能發一念喜愛心。

喜愛の心を、何を聞いて起こすのでありますか。現にこの世へ現れたもうた方々より、仏さまの広大なるお慈悲でましますことを聞かされてみますと、……吾々のような箸にも棒にもかからぬ、こうした者を助けんと仰せある仏智不思議をよくよく聞かせて頂いてみますと、遂には仏のお智恵を賜つて喜びの起こすのであります。

不断煩惱得涅槃。

吾々煩惱の者が、到々このお慈悲を蒙る故に、遂には涅槃分（ねはんぶん）を得させて頂くということなのであります。

凡聖逆誘齊廻入。

五逆十惡の耳四郎如きもお助けに預るのであります。恐らくかの耳四郎とても、ただ好んで人殺しをして居ったのではなからうと思ひます。よくよく生活に困り、それを仕事のようにして居たものであらう。その耳四郎が友達に殺されたが、自分は殺されずして、仏様が身替りに立って下されたとあります。世上これを不思議と喜ぶなれども、

私は兄貴から聞かせて貰つた。兄貴から仏さまの本願海のことを聞かせて貰つて、これで満足させて頂いたのであります。

人間界に満足するもの無い故、仏智不思議を聞かせて頂いて満足をさせて貰う。満足の根源（こんげん）というものは、成功して、丈夫になって満足するものかと思つていましたら、無一文の仕様の無い、これをお見捨て下さらぬお慈悲であつたかというのを聞かせて頂いて、このおまこと、誓願不思議を頂いて満足せしめられるのであります。

往生を信じてなどと特別に力をいれる訳のものでないのであります。ひとりでに信じさせられて終うて、お眞実に遇えば南無阿弥陀仏（なむあみだぶつ）と称えさせて頂くばかりであります。

人間に生れて、人の実意がわかるというのは大変なことであります。小さなまことでも嬉しいものですが、兄貴が私へ申した言葉、

「あんな者いかにぬと言わずして、彼のいかぬところが可哀想」と言うてくれたこと、

これ！このところをよく聞いて頂きたいのであります。このような話は、人間界の話でないであります。特別、桁はずれたものであります。

「どれだけもお呆れの無い！」

これがまあ、まことに口にもかけられない話なのであります。

有難い形容詞を並べたてる様で、かく申している私自身も歯がゆく思うのでありますが、「広大の御本願、何処までもあきれぬ」と仰せある仏のお慈悲ということは小さな話でないであります。こここのところを皆様に分ってほしいのであります。

何処までも／＼お呆れのないお真実、これが超世不思議のお慈悲にましますのであります。世界に人々多くありまするが、この御真実を聞いて参らぬ者は無いのであります。しよ。それ程に言葉のさしはさめる余地のあるものでないのであります。この御真実を聞かせて頂けばこの身滅ぶとも、これ一つが有難いとなって、汚い心の中に頼りとさせられるのは、愈々このご真実を仰ぐばかりとなるのであります。このご真実を頂く故、生命終って彼土へ参らせて頂くのであります。如何なる人でもであります。

東京あたりでも、学生など、なんのかのと平素は申し居りますが、愈々実社会へ出て、色々やって居ります間に、遂には仏智の広大無辺さに気付かせて頂いて、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏となって「念仏申さんと思ひ立つ心のおこる時、即ち摂取不捨の利益にあずけしめたまうなり」とさせて頂くのであります。

前田清次郎さん

(一)

今はすでに故人になられた、横浜の前田清次郎さんはその著しい人であった。大正五六年頃であったろうか、求道学舎を訪ねた前田さんは、横浜の別院で何十年も聴聞して世間からは立派な同行としてほめられていたが、先生に向って聞き覚えのお領解を長々と述べたのである。ところが先生は、「あんたの話にはお慈悲がぬけている」と一言答へられたのである。自分では立派な信者と思っていたのに、先生から一本やられて、腹を立てて帰ったのであるが、それからというもの心は落着かず、とうとう今迄の信心は崩れて了うたのである。

それから日曜講話を聞きに来られ、講話の後で、先生が質問のある方に一時間ばかりねんごろに応えられた。その席で前田さんの問われたことは、はっきり記憶せぬが、「信仰が判るの、喜べるのというのは嘘です。こちらは喜べぬ、浅ましいだけです。永らく別院で色々の方から

いま先程、読み上げました、聖人一流のご文章、講釈申上げると有難いのでありますが、時間がありませんので残念ながら申せませぬ。

「弥陀の本願には老少善悪の人をえらばれず」^{けた}けはずれのお慈悲、善人だけが助かるのではない、悪人が助かる教であります。それ故に心の苦しみは除かれてしまうのであります。他の教では、花香を仏前に差し上げる。東京など日輪を拜んでいる人もあって、これが信心と思われているのであります。

真宗はそうでない、ご真実を頂いて日常、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏であります。仕事をしていても、台所に居ても何処に居ても何をしていても南無阿弥陀仏であります。『本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念仏にまざるべき善なき故に、悪をも恐るべからず、本願をさまたぐるほどの悪なきが故に云々』

私は悪いことを致しましたという。仏さまは気にすな、仏がついている、苦にするな仏がついていると仰せ下される。どうかこの仏様のお慈悲を頂いてほしいのであります。それ程のお慈悲なることに気をつけて頂きたいのであります。ではこれ位にして、この後お尋ね蒙ってお話申そうと思ひます。

以上。

柳瀬留治

聴聞して来たが、ちっとも有難くならず、やがて仏に逆う心が起り、仏壇を踏みこわして縄でふん縛って、外へ放った……」

「いかにどう浅ましい心が起ろうとも起れば起る程哀れで捨てられぬ、それが仏の**み心**である」

としきりに話されるが、前田さんは自分のそうした、「仏がわからず、浅ましいだけ」

が金城鉄壁の信仰の如く抗弁して先生の仰せを寄せつけないのである。その時先生は、

「君は何しに此処へ来たのか。こちらの話を聞きに来たのではないのか。さきから自分のことばかり述べたて、わしの言うことを聞かぬ。」

黙りなさい。君の云うのは胸の暗ばかりだ。光はわしの言う話にあるのだ。顔をあげてこちらを見なさい。仏天の光明がこちらにあるのだ！」

と、先生は卓を叩いて大喝されるのである。驚いて見上げ

ると、先生は満面朱を注いだお顔で、仁王立ちしていられた。誠に仏の忿怒相そのものである。強(ごう)の者、前田さんもさすがに口を封じられて、驚きをもって聞き始められた。それが機縁となり忽ちにして濁悪の己れをかくも哀み給う大悲でましましたかと感泣されるに至ったのである。烈しく反抗されただけにその浅ましい己に注がれる仏の真心の何と深きことかと、毎日曜の御講話ごとに涙をこぼしてお喜びになる姿が今なお目に見えてくるのである。

さてこの前田さんには子供がなかった。或朝仏前で勤行していられると、近所で赤子の泣く声をする。急にその児が可愛く、我が子の様な気がし、遂にその子を後継ぎに貰う約束を両親にした。

又、大正十二年の関東の大震災は特に横浜は烈しく、突如と起った上下動で、殆んどの家は倒れ、火と化し、大地が割れて水を噴き出した。前田老夫婦は別れ別れに遁げ、それから毎日、日夜声を漕らして奥さんを探し死骸なりとも一目でも見たいと、川に浮ぶ死骸、路傍に焼けたトタンを被せてある死骸をのがさず見て歩かれたが、到頭それきり行方がわからず仕舞であった。

立退先へ私が見舞に行った時、

「かかる宿業を持つにつけて一入仏の深い御あわれみが

のお話を聞きに来られるという有様であった。

常音先生が講話の上でも、しばしばこの話をなされたことである

「還相廻向によりこの世に生れて来て、必ずお前を守つてやる、金には心配するな」

には、思わず涙がこぼれるのであった。全く仏心そのものである、如何なる出来の悪い人でもこの一言には仏心を知らされるに違いない。

(三)

自分が本当に浅ましいとか、悪いと判るのは仏心に遇つて初めて感じるのです、お前そんな心を持っていて悪いと思わぬのかと、攻め立てても、一応は悪いと思うものの、本当に悪かったと頭の下るものではなく、救いとられて始めて、かかる者を慈しみ給うかと、身の浅ましいことが判るのである。

我々は矢張り生物で、本能的に己を守ろうとする。これは体の細胞から、脳の組織までが、おのれを防衛し、悪くても肯定しようとさすのでないであろうか。でも「往生のために人を千人殺せ」といわれると、それも出来ぬ人間である。私も何か悪いことをしてのつぎにならなくなると信仰に気付くだらうと思ったことがあったが、強いて別に悪事や、やり損ねはせずとも、真面目に生きようとすれば誰

有難い」

と念仏を称えていられたことであった。

(二)

やがて前田さんの貰った子供の太郎さんが長じたけれど性質(たち)が余りよくなく、金使いが荒く、そのため前田老人はよけい可哀想でたまらないのである。前田さんも酷く老いて脚が悪くなったが、それでも日曜日には必ず求道会館に来るのである。そのうちに途中で車にはねられてひどい怪我をされ、其後あまり顔を見なくなり、やがて床につくようになった。

ただ心残りなのは、身持のよくない太郎さんが可哀そうであつた。或時、太郎さんに

「私のいのちも永くない。わしは仏様のお慈悲一つで死ぬ。わしが死ぬと、又お前は金に困るであらう。だがちつとも心配するな。わしは仏の恵みから還相廻向によつて、必ずこの世に生れ変わって来る。そしてお前に金で苦勞させない。さらさら心配するな」

と云われた由である。そして遂に世を去られた。やがて太郎さんは、どうしたことか気付いたものか、この深い心の一言から仏の慈悲に気付き、念仏を喜ぶ人となり、前田老人の後をねんごろに葬らい、一方事業の上でも成功して立派な人物となり、横浜市議員ともなわれ、又常音先生

しも自分の欠陥や性癖に気付き、直そうとしてもどうしてもならず、これが自分の病根であり、業だということに気付き「そくばくの業を持ちける身にてありけるをたすけんと思し召し立ちける本願」に頭が下がるのである。

昭和の初め頃であらうか、求道会館の夏季求道会に、藤川さんとか申す軍医さん御夫婦が遠くから聞きに来ていられた。その奥さんという方は非常に温和な、のんびりした方で、先生が汗を流して話され、聞く人々も真剣に聞いている席上、しばしば居眠りをしていられるのを見受けた。後に常音先生から聞く処、その方は「どうも私は吞気で真剣になれぬ性分で本当に困ります」と先生に訴えられ、先生は

「そういう、わが身の一大事にも真剣になれぬ性分、そうした性分は一生それ仕舞です。それで終るあなたを御覧になる仏は、可哀そうで見捨てられないのです」と申されると、たちどころに「何と有難い仰せでしょう」とおよろこびになった由である。

また他の方で何一つ不自由なく幸福すぎるので、これではどうしたものかと、仏のお慈悲を聞き、御安心なされたお話も聞いたことがある。

心の和やかな人も、善人も、心が溝泥の様に汚いと悩む人も、又、幸福で富み榮えている人も、それが業（ごう）で、何かの業を持たぬ人は恐らく人間に誰一人ないことであろう。業を持つ以上、仏の御恵みに遇えると思うのである、摂取不捨の大悲のまします以上、必ずや救われるであろうことは疑いがないと思うのである。

附記

これは私（花田）が求道会館にお参りした時、一番前の席に極く素朴な姿で念仏申し申し常観先生のお話をきき入っていられる人があった。そのお帰りの時の横顔が、かつて私が六高時代の校長、丸山先生によく似ていたので、あとで常音先生におききすると、

「そうなんだよ。丸山さんだよ。実はあの人は幸福すぎて、聞法するようになった。十二人の子供を皆それぞれ立派にそだてあげて、最後に未娘を嫁がせてから、家には老夫婦だけになり、毎日火鉢をかかえて、張合い抜けして歎息ばかり出るという始末で、ノイローゼ気味となつて、会館に来るようになった。」

それまでは、いつも近角が、どこどこまでもお見捨てのないお慈悲一つをくりかえしてばかりいると軽く聞いて聞法の心はなかったが、自分がそうした状態になつてか

随感随想

「と」と「の」のちがい

去る四十三年、作家の川端康成氏がノーベル文学賞を貰った時、〃美しい日本の私〃と題して講演されました。

最初の題は〃日本の美と私〃でしたが、「と」を「の」に変えたことについて川端さんは『あつかましい題をつけてしまいました』が「の」は誠に複雑怪奇（ふくざつかいき）な言葉でして、日本のことをしゃべれば、それはすべて自分のことといったことです」と語っています。

私も「と」はわかりますが「の」はわかりかね、論文を読みかえしやとわかりかけた時、ある禅家の方の本を読み、成る程と合点がいました。

この川端さんの講演は、日本の文化をのべるのに、初めから終りまで仏法のお話につきています。

最初に、道元禅師の歌

春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪さえて冷しかりけり

ら、今迄、六高や甲南高校で校長をして、教授などが神経衰弱にでもなると意気地なし、と見上げていた、ひどいことで思いやりなどなかったことが恥ずかしい、と云いながら念仏よろこぶようになった人だよ」とお聞きして、びっくりしたことがあった。

世間に韋提希夫人のように逆縁から聞法の縁がひらける人が多いが、順境にあつて聞くようになる人もあるんだなあと実地に知らされた。正信偈にも「善惡の凡夫人を憐愍す」とある通り、こちらの善惡の如何でなく、善惡の宿業からのがれられぬ者をあわれみ、救い遂げずばやまじとの御仏縁一つにもようされて、念仏成仏の道がひらかれることを知らされた次第である。



園 憲 章

ごく当りまえのことを歌っておられます。当りまえのこととは、まことで、よいことで、美しいこと、真、善、美を歌っておられます。続いて、明恵上人、一休和尚、親鸞聖人、良寛さんと、都合五人の方をあげ、仏教にはじまつて、仏教に終る論文です。

川端さんは日本の文化を語るには、仏教を置いて他にないことを、そして現代の人々にそのことを知ってほしいという意図（いと）があったのではないでしうか。

本論ですが〃美しい日本の私〃の「の」に注意してください。「と」は欧米人の人生観、「の」は日本人の人生観です。

昔から欧米人は、父と子。日本人は父の子、母の子、先生の生徒、仏の子、子の親、等々といひます。「と」とした時は、相對五分と五分、二元對立で、これではケンカです、對等でないといひます。我他彼非（がたひし）

の考え方はあさましい限りで、これでは争いの絶えることはありませんすまい。

「の」となると、仏の子、子の仏、親の子、子の親と、二つの相反するものが一つにとけあうことになりましよう。二にして一、一にして二、それが自由にとろけた味わいがあります。

真宗で、仏凡一体（ぶつぼんいったい）と云われます、親子は一つのもので、「の」の字は深い意味があります。相對世界で出来あがつて憂悲苦悩の絶えることのない我々になりきって下さることを知らされます。そこにめざめたら、二つでなく一つであったと知らされるのであります。

（昭和四十九年四月二〇日）

あ、無常

去る二月九日の朝日新聞の短文の一節に、

露と落ち露と消えにし我が身かな　なにわのことも夢のまた夢

と、豊臣秀吉の辞世の歌を掲げてあった。彼は、尾張の田舎の百姓の出で、織田信長にみとめられ、トントン拍子の出世で、足輕から城主となり、ついに位人身をきわめて太閤秀吉、大政大臣、関白殿下と、不出世の英雄となったが、慶長三年八月十八日の朝、齡六十三を一期（いちご）としてこの世を去るに臨んでの歌である。

念　仏　詩　抄

木　村　無　相

悲　願

——往還廻向文類を頂きつつ

悲願

悲願

// 諸仏称名の悲願 //

悲願

悲願

// 必至滅度の悲願 //

悲願の結晶

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

正信偈とは

正信偈とは

正信念仏偈

ナムアミダブツ

ナムアミダブツは

ご方便

如来の真実の

ご方便

自然を知らせん

ご方便

親鸞聖人

自然法爾章に

// ミダブツとは

自然のようを

しらせんりようなり //

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

彼の晩年には、未だ幼い後継者の秀頼の行末を案じて、前田利家、徳川家康に

「かえすがえす秀頼のことをたのみ申し候」

と、再三再四懇願し「名残りおしく候」とあの世へ旅立った。

天下人となってからは日本狭しと、朝鮮、唐（から）、天竺（てんじく）に眼を向け、實際これは失敗に終わったが当時の彼と臨終の彼と、前後同人と思えぬ人間の終末こそあわれである。

私共が最初にならいいおぼえた「いろは歌」の前半

「色は匂へど散りぬるを、わが世たれぞ常ならむ」

までを身をもって体験しているが、後半の

「有為（うる）の奥山今日越えて、浅き夢みじ酔ひもせず」

の光明の世界がひらけないままであった、無明の深夜のさすらいで終るいたしました！これは他人事ではない。

弥陀たのめ　弥陀たのめとて露も散る

と、度重なる愛児の死に逢うて一茶はこの句をもつて、さき立つわが児を知識として合掌している

（昭和四十九年二月二〇日）

滋賀県能登川町、発願寺発行、「獅子吼」誌より抄出。

正信偈とは
念仏讃歌
正信偈とは
仏恩讃歌
“唯能常称如来号
応報大悲弘誓恩”

ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
出入りの息
はいる息

でる息またぬ
いのちとよ

出入の息ぞ

ナムアマミダブツ

つらぬきて
生きの身の
生きのいのちを
つらぬきて

ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
大悲の本願
称えさせ

たまいてわれに
聞かしむる

大悲の本願

ナムアマミダブツ

誰ぞ

称えさせ

たもうは誰ぞ

信じさせ

たもうは誰ぞ

ナムアマミダブツ

古稀(こき)

——花田先生に

先生も古稀

わたしも古稀

古稀といっても

めずらしくない

今の時代に

先生も古稀

わたしも古稀

ともかくも古稀

満七十歳——

先生よ

長生きされよ

八十まで

九十までも——

わたしも生きたい

ナゼならば

わたしの聞法

これからだから——

ああ

先生も古稀

わたしも古稀

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ



念仏成仏の白道

花田正夫

仏道とは、我々衆生が仏になれる道である。仏とはさ・
れる人であり、地上ではじめてそこに到達されたのが釈尊
である。そのさ・のりの世界は久遠の昔から開けていたとこ
ろであり、尽未来際かけて不滅のものである。しかもその
さ・のりの徳光は廣大無辺でいたらぬ限もなく、また微塵の
中にも満ちたまうのである。この境界は華嚴經に説かれて
いて、善財童子の求道物語はその象徴である。

次に、そうした自在、無碍の御智慧をもって我等衆生の
い・っ・か・は・楽・になる、ど・こ・に・か・幸・せ・があるかのように幻想
し、性・こ・り・もなく迷い苦しむすがたを照覽されて、その者
を光明の世界に導き入れようとの切なる本願をおこされ、
種々に善巧方便をめぐらして、衆生をのこらず成仏せしめ
得るとのよろこびを述べられたのが法華經である。その趣
きは長者窮児の譬に教えられ、又火宅三車の譬の示される
通りである。

更に、八十御入滅を前に御遺訓として、一切の衆生は悉

を失い、あらゆる宿業の綱にしばられて進むべき修行の足
も無い凡夫の身には、その道はあれどなきが如しである。

親鸞聖人の八十五歳の御頃作られた正像末和讃に

○正法の時機とおもえども底下の凡愚となれる身は

清淨真実のころなし發菩提心いかにせん

○自力聖道の菩提心　ころもことばもおよばれず

常没流転の凡愚は　いかでか發起せしむべき

とあるが、これはひとり聖人の時代のことではない、現に
人の子のある限り、そうしたこと以外に出られない身であ
る。最近の新聞や雑誌に青年の宗教に対する関心度を統計
で示し、日本人には非常に宗教心が薄いと報じているが、
私自身の上で申せば、絶対真実なる仏心を求める心などは
凡夫として皆無であると告白せざるを得ない。

人生の苦相

仏はまず人生の苦相を自覺せしめようために、理をつく
し、あるいは譬喩をもって種々とおしえられる。

ピンヅル尊者が或國王に説いたと伝えられる古井戸の譬
は有名で、トルストイがこれを聞いて身震いして驚いたと
いうことである。それは、

印度の平原に一人の青年がいた、朝毎に東天を染めて旭
日の輝くを見て、東方には必ず美しい理想の国があると
思い、故郷をすてて東方へ旅立った。然し行けども行けど

く仏性を有すと、仏智をもってお見抜き下さって人生の尊
厳さを教えられ、親殺しの阿闍世も仏心のまことに浴して
成仏出来たことでそれを実証して下さっている。又別れを
惜しみ悲しむ人々に、肉身は滅すれど法身は不滅であり、
常住であると仰言って、あらゆる衆生の真実のよるべとな
って下さったのが涅槃經である。

以上の三經によって、仏陀のおさ・のりの内容と、そこに
あらゆる衆生を導き入れることの出来るとのよろこびと、
更に、この大道は尽未来際かけて常にあたらしく、時間と
空間を超えている境界であって、人の子のあろうかぎり、
どこでも影現して下さるたのもしさをお示し下さったので
ある。

仏教二千五百余年を通じて、仏弟子達はこの廣大無辺に
して深くして涯底のない仏としてのさ・のりを求めて今日に
およんでいるが、煩惱の雲霧におおわれて真実の智慧の目

も太陽には近づけないで幾山河をすぎた。やがて疲れた旅
人は、故郷を憶い、後方を振返ると、巨象が砂煙をあげて
追いかけて来ていた、恐ろしさのあまり東へ懸命に走った
けれど象の足は速い、段々距離が迫るにつけて、あたりを
探すと、一つの古井戸があつて、幸に大樹の根が井戸に下
っていた。その根にすがって中に入り、ホッと一息して底
を見ると、大きな龍が口をひろげて旅人の落ちるのを待つ
ている。周囲を見ると四匹の毒蛇が今にも飛びかかるうと
して頭をあげている。耳をすますとガリガリと音がする、
白鼠と黒鼠が木の根をかじっている音であつた。そのうえ
に降りる時根に作っていた蜂の巣をゆさぶったので、蜂が
手と云わず脚といわずチクチク刺す。空を仰ぐと野火の煙
が段々とひろがっている様子である。

絶望してボカンと開けた旅人の口に、一日に五滴の甘い
蜂蜜がおちて来た、その甘美さに酔わされて、旅人は身辺
の危険を忘れていて、という譬喩である。

別に解説するまでもなく、人々が理想を描いて世に処し
て行くが、無限の欲求を持つ身には満足ということもなく
過ぎ去ったあとを省みると多くの友人はすでに亡くなり、
私共もまたその巨象から逃れきれないが、力の限り遠ざか
ろうと走り、そこにしばし安住場らしいものを見出して、
下を見ると死の竜が口を開き、四辺を見れば病氣や災難が

すきをうかがい、邪見や妄念の蜂になやまされ、日夜の鼠が生命の木の根を噛り、老病の野火も身辺に迫る有様は全く言いようのない苦界である。唯五欲の美酒に舌鼓を鳴らし「あたらし世を仏になすな花に酒」と酔いしれている。

法華経には、有名な火宅三車の譬をもって警告される。古くなった大きな家が火事になって、今にも崩壊しようとしているのに、その中に子供等が居て、遊び戯れている。これを知った親は「早く出よ」と呼びかけるが、子供等は一向に耳を借さない。そこで親は善巧方便をめぐらして、早く出た子に大白牛車、次の子に鹿車、三番目に羊車を与えようと云うと、子供等は先きを争って飛び出した。親は子供等が安全地帯に出たのを見て非常に喜んで、一人残らず大白牛車を与えた、とある。

以上の譬は、仏陀のさとり目の目に映る人生の実際の姿である。そこに仏陀の限らない慈悲の御手はさしのべられるのである。若し我々が病氣であることを知れば、薬を求め医師を問うのが世の常であるが、我々には身びいきな心にさえられて、自分の真相を知ることが出来ないで、つかの間の快楽にうつつをぬかしている。藤村の詩に

悲しきかなや人の身は

なき慰めをたずねわび

道なき山に分け入りて

聖徳太子は三経義疏に「不請（ふじよう）の友」としての仏陀の大悲心を讃えられて「世の友は請うてはじめて与えられるのに仏陀は我等が請うすべし知らぬのに、我等になくはならぬ友となつて下さる」と随喜せられているのも、御自身を「枉（まが）れる者」とも「共に是れ凡夫のみ」とも、時に「愚心および難し」等々と、仏智照護の下に自己のあさましさを知られての慚愧と感謝の表白である。

太子は更に「如来に調伏（ちようふく）せられて如来に帰依し、法の律沢（しんたく）を得て信樂の心を生ず」と仰言る。如来に帰依せよと云われても我々相對虚仮（そうつたいこけ）の身には不可能である。そこに母の念力が子にとどいて母を慕うように、如来の慈育を蒙って帰依心も生じ、仏法のうるおいに浴して信じよるこぶ心も出来るのである。

さて仏陀の善巧大悲のこころを真正面から説かれたのが大無量寿経であるが、この経の大意を親鸞聖人は

「弥陀誓いを超発して広く法蔵を開いて、凡小をあわれんで、選んで功德の宝を施すことをいたす」と

と、経の宗旨を示されている。功德の宝とは南無阿弥陀仏の名号である。

龍樹大士は、念仏成仏の道は仏力によるが故に易行道（いぎようどう）であると讃えられ、天親菩薩は、煩惱成

なぞなき道に迷うらん

とあり、林美智子の名文句「花のいのちは短くて、悲しきことのみ多かりき」も、人生の黒い影をかい間見て驚いた声であろう。

真に智慧ある人は「穢土をいとうて清浄界を求める」であろうが、凡愚底下のわれらは

残水の小魚、食を争うて、やがてその涸渴を知らず

糞中の穢虫、居を競うて、その外の清ら知らず。

で、生涯を空しく果てるのである。

さしのべられる御手

嬰兒は歩くことはもとより匍う力もなく、ただ泣くばかりである。母の手はそこにさしのべられて、乳も着物も調え、汚物の始末もすべてして下さる。まして仏陀の凡夫救済の御手は、苦界に居てそれに目醒めず、無常の世にあって危きに驚かず、右往左往しながら空しく終る外ないことを知り尽くされて、全く仏力のひとりばたらき、絶対の他力の御はからいとして救いの手をさし延べられるのである。それなのに最近の一流新聞までが、他力本願という言葉葉を人間の持つ乞食根性の依頼心、依存主義の代名詞として使っているのは、まことに残念なことである。聖人が「他力というは本願力これなり」と特筆して後世に誤りなかと念じられた御親切も思い併わされる。

就の凡夫に適した道は弥陀の本願念仏ばかりであると勧められた。曇鸞大師は、智慧浅短な凡夫の身には、草を置いて牛を引くように、念仏の秣（まぐさ）に導かれる以外に身を完うする道はないと自信の至極を述べられている。この曇鸞大師の実語にたちどころに念仏門に入られた道綽禪師は、一生造惡のわれらがために、称我名字、わが名を称えよと仏が勧めたまうて、若し空しくなるようなことがあれば、正覺は取らないとお誓い下されているぞと称名念仏の一法を掲げて下さっている。

善導大師はまた極惡底下の衆生の臨終にあらゆる苦惱が身にせまり、仏心の尊さを教えられても、仏を念ずることも出来ない者に、無量寿仏を称えよと告げられ、十声念仏して命終し浄土への縁が結ばれたとある觀經の文に御自身を見出されて、愚惡の凡夫の救いは称名念仏一つにあると、自ら帰して一切の人々に勧め、その道こそ仏の本願にかなう白道であるとあかしされている。

源信僧都も法然上人もこの惡凡夫の救われることは仏教の要であつて、自分もこれあつて念仏成仏させて頂けるとの喜びを、往生要集と選撰集に詳しく述べられている。

叡山二十年の修学修行も空しく、地獄は一定すみかぞかしと表白された親鸞聖人は、幸に恩師法然上人の勸化によつて「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらす」ばかりで

あると自覚されたのである。

○念仏成仏これ真宗 万行諸善これ仮門

権実真仮をわかずして 自然の浄土をえぞしらぬ

○信は願より生ずれば 念仏成仏自然なり

自然はすなわち報土なり 証大涅槃うたがわず

と、念仏、成仏、自然の無碍の一道を聖人は極唱せられたのである。

駄足ながら、私ははじめ頃、一行即万行、万行即一行と云われるように、念仏であれ、題目であれ、坐禅であれど、れか一つに徹すれば万行は自然にそなわるというように思っていたが、理としてはその通りであるが、一行に徹することが至難である。ところが念仏には本願が誓われている「称我名字と願じつつ、若ん生者と誓いたり」とあるように、称我名字の道が、仏願に順ずる道であり、その仏の誓いの力によって必ず往生成仏せしめて下さるのである。本願や名号、名号や本願とも教えられるところである。

思えば、万行の中の一行さえも徹し得ぬ身に、その徹し得ない者を捨てたまわすして必ず成仏せしめようとのお誓願が念仏の一道とあらわれて下さったのである。御誓いの御名のたのもしさ、一切善惡の凡夫の成仏の道がここに開かれるのである。

洗えぬ身と知らされるにつけ、法然上人が私共と同座して下さって「釈迦の勧め、弥陀の勅命をうけて念仏に帰れ」とのお導びきに、唯一の燈火を頂くばかりである。

昭和四八、一一、一八日。

まさに発願（ほつがん）して我が国に生れんと願ずべし其故は、諸の上善人と俱会一处（ぐえいっしょ）することを得なければなり（阿弥陀經文意）

時々寝つきのわるい夜があると、適ぎ去った事どもを省み、人と人で行き違いばかりして真に会うということのむつかしさを知らされる。

おもえば、利害得失や、好惡の感情のままに、集散離合して勝手次第という始末であった。まれに意気投合して、利害を超えた交わりを誓った仲も、長い歳月の流れに色あせていつて、人の世のさみしさの極みに立たされる。

こうした時、フト博多の七里和上の語録に、「陶器を重ねて箱にしまう時、陶器と陶器の間に紙をはさむと傷がつかない。人と人との交わりもその間に念仏の紙が大切である」

というような意味のものがあったのを思い出し、和上もまたこうした問題で苦勞された挙句にこうした道を見出されたのだなあ、と感銘した。

ともしび

聚墨記

我は白黒をも知らぬ童子の如く、是非も知らぬ無智の者なり。（法然上人の御言葉）

はじめて上人のこの文を読んだ時、あまりに誇張されすぎていると思ったが、七十になった今日、種々のことふれて、段々と私自身がこの通りであるとうなづき始めるようになった。

私共がもし黒を黒、白を白と正しく見抜く力があれば、人からだまされたり、やりそこなうこともなく、多々ますます弁ずることも出来よう。

仏教二千五百年を通じて、あらゆる高僧達は心血をそそいで生活を正しくし、心をしずかにし、澄みきった智慧を専心もとめて来られたのである。

しかし、凡俗、鈍根の私共は、身びいきな心に防げられて、共に不完全な人間同士であるのに、われよし、かれわろしと思ひ、老いても老いの自覚（おいぼれるのでなく正しい自覚）も出来ず、更に、何時か、何処かに幸せがあるだろうと、身勝手な、虫のよい幻影を追ひもとめ、次々と幻滅の苦におちて、愚痴をこぼす。こうした泥沼から足が

飽くことを知らぬ利己のつので、われひと共に互に傷つき合うほかはない身に、仏陀の大悲の御手、お念仏が入って下さる時、いろいろの問題を持ったまんま、障りを転じて下さり、破れ易い友誼がまもられて行く。

（昭和四九年二月二五日）

芸のこころ

先年、歌舞伎俳優として六十余年の生活をした片岡仁左衛門さんが云った言葉に「自分の芸に満足すればもう進歩はない、三十代頃までにこれでいいんだという時期は一度あるが、これはうぬぼれである。四十五と進むにつれて過去の芸の未熟さを恥じるようになり、芸道に終りがないと知らされる。

役者が一番大切なのは、その役になり切ることで、うまくやろうとか、奇麗に見せようなどの邪心があると行きれない。自分を捨てきって一つになる、そこまでいけば、身体からにじみ出るものが生れる、持味が自然に出る。

そうなりきるには、人間の知識とか信念だけではいかぬ手を合せるというような信仰の世界が必要で、無心に精進すれば道は開けてくると思う」とあった。かつて池山先生が一芸に達した人からは種々と教えられるもだと云われたことも思い併わせられた。

あとがき

酷暑となりました。例年ながら八月六日に近角常音先生の御忌日を迎えますのでそれまでにと願って、先生の御法話の記録を大字さんのおかげで掲げさせて頂きました。信仰の結果については注意しておふれにならず飽くまでも仏陀の大悲の至極をお説き下さったのも、あとに読くものが功利的落し穴に墮らないようにとの細心の御配慮からでした。「やりそこないのやまぬ、できそこないの身」とよく仰言ったことは身にいよいよしることであります。

前田老人も御縁の深い人であります、滋賀県の発願寺の園憲章さん御一統も御縁の深い方とて、発願寺さんが月々御門徒に配布していられる一枚刷りの「師子吼」誌の中から二節ばかりを転載させて頂きました。最近工業の発達から仕事に出掛けられる人が多く、寺の御縁も出席し難くなりました今日、手頃な文書によって仏縁を結んで下さることは今迄の盲点を満たして下さることに喜んで居ります。幸に発願寺様には御子息が帰寺され、住職も継がれましたので、お二人の御協力で法灯を掲げて頂くことが出来ありがたいことです、又七月の参議員選挙でテンヤワンヤのさわぎ声が街に溢れています、現実はきびしく、不安と不信が満ちて、苦しい時の神

だのみ式な傾向が基盤となつて、超能力ブームがおこり、魔術、妖術、予言、占い、等々があふれているのを聞くにつけ、徒然草の著者、兼行法師の言葉「どんな山奥の一軒家でも、主人さえ居れば狐狸は出入りしない」というように、内心にしっかりとした主人を持てば、幽霊の正体も見抜くことが出来て、無畏の徳を恵まれるのであります。

華嚴經に、文殊菩薩の行かれる後ろ姿を拝みながら、舍利弗が讃えて一見よ、菩薩の行くところ、険しい道も平坦に、茨の多いジャングルは自然に転じて花園と飾られる」と驚いている。又経には「仏の行履（あんり）するところ日月清明にして天下和順す」とあるが、この仏心を頂く生活の大切さをいよいよ知らされるこの頃であります。

この道や わがたどる道 そのままに
国のちからと なりぬべき道
の福島先生が終戦後、大混乱の頃詠じられたこともありがたく頂いております。

△御案内▽

〇一国会例会

毎月、第一、二、三日曜、午後一時半。
南区駈上町二の八八 一道庵。
市バス、新郊通り一丁目下車、東入る三

筋目、左入る二軒目。
地下鉄、新瑞橋終点下車、徒歩十五分。
名鉄、呼続下車、徒歩二十分。

〇教西寺、法話会。

毎月二十四日、午前午后。
昭和区小松町二丁目四。
栄町バスターミナルより杖中行き北山下車。
名駅前より、①妙見町行き、御器所通り下車。
今池、又は笠等方面より、御器所通り下車。

定価	半年	500円 (送共)
	一年	1000円 (送共)
編集・発行人	花田 正夫	
印刷人	吉野 穂志郎	
発行所	慈光社	
振替口座	名古屋一〇四七〇番	
郵便番号	四五七	